

「小さな親切」運動本部賞

親切のバトン

福岡県 福岡教育大学附属小倉中学校 三年 櫻井つぐみ

私は走者。親切のバトンを受けとったあの日から、バトンを持って走り続けている。

去年の七月、九州地方を大雨が襲った。登校中の私はバス停に立ち、バスを待っていた。いつもより長く感じた待ち時間は、知らない町にたった一人であるかのように心細かった。バス停に一人のおばあさんが近づいてきた。知らない人だ。会ったこともない。けれど、そのおばさんは私を見て、ニコツとして、

「大変だね、大雨。これあげるけん、拭き。」

と、タオルを渡してくれた。そのちょっとした親切が私はうれしく、安心した。私も誰かにこんなふうに関わりたいと思った。タオルという姿の親切のバトンを受けとった。

やむことを知らない滝のような雨。川になった道路。焦げ茶色の水たまり……。平成30年7月6日、大雨が再び私たちを襲った。バス通学の私は朝早くに家を出たため、バスに乗ることはできた。しかし、バスはまったく進まない。友達と、休校になりそう、と話していた。一時間たち、携帯に休校の連絡が入った。他の中学校や小学校も同じだったようで、バスのところどころから、

「休校って。家に帰ろっ。」

と、声が聞こえてきた。バスには7人の小学生がいた。家にひき返すため、小学生と共にバスを降りた。しかし、待っても待ってもバスは来ない。バスは全線通行止めだ。休校と喜んでいて小学生の顔から笑みが消えた。不安そうな表情を見て、一年前のあの光景が浮かんだ。あのとき私は声をかけてもらい安心し、嬉しかった。私にはバトンがある。今だと思った。

「大丈夫。みんな、お母さんたちと連絡取れた？」

声をかけると、小学生は一瞬驚いていたが、すぐに安心したような顔を見せてくれた。連絡がとれた人がほとんどだったが、親が迎えにくるまでに時間がかかるようだ。大雨の中、一人である心細さを知っている私は、小学生に、

「親がくるまでいっしょに待って、安心して。」

と、声をかけた。小学生はとてうれしそうだった。同じバスに乗っていた中学生も、いっしょに待ってくれた。皆でおしゃべりしていると、あっという間に時間がたった。20分ぐらいして最後の小学生の親がきた。その子が、

「中学生がいっしょに待ってくれた。楽しかった。」

と、親にうれしそうに言い、私にも「ありがとう。」と、言ってくれた。心がじんわり温かくなった。

親切は、受けた人もした人も心が温かくなり、とてもすばらしいことと思う。身の周りを見わたせば、今日一日でもたくさんの親切ができる機会があるだろう。それに気づくかが大事だ。あのときもらった親切のバトンをお守りにして心におき、気づきのある日々を送っていきたい。

さあ、今日はどんな人と親切を通して出会えるだろう。